

西洋建築事始め —棟梁たちの擬洋風建築 II—

山村 賢治(建築史学会)

4. 漆喰系擬洋風の隆盛

<木骨石造系から漆喰系へ>

居留地や東京に珍しい建物が次々に建っていく中、地方にも西洋館を！という声が湧きあがるようになり、明治五年の学制改革を期に学校だけでなく、郡役所、県庁、警察署といった地方の公共施設も洋風化が求められるようになる。こうした声に押され、あるいは待ちかねて、各地の棟梁は東京や横浜、長崎に出掛け、木骨石造系の擬洋風やヴェランダコロニアルを見聞し、国許に帰ってまず小学校や役所を建て、やがて住宅や商家、時には仏寺や神社にまで及んでいく。それらのうち今も残る例を見るとわかるが、手本となった木骨石造系の擬洋風とは同じ見よう見真似の洋風建築でありながら、明らかに違っている。信州佐久に現存する中込学校(M8市川代治郎)の場合、屋根の上には塔を乗せ、前面にはヴェランダを張り出し、壁には



旧中込学校(佐久市)

漆喰を塗ってぐるりと包み、木材の露出したヴェランダ回りはペンキを塗り、全体を白く仕上げていますが、先行する木骨石造系擬洋風との最もわかりやすい差は技術面で、部分的にも石は張らないし、ナマコ壁も使わず、すべて土壁の上に漆喰を塗る。アーチや隅の石積み風な作りも、

実は黒い漆喰を盛り上げたにすぎない。結局、石の西洋館は土の西洋館に変貌してしまった。こうした土で作られた各地の擬洋風のことを“漆喰系擬洋風”と呼ぶ。明治7年頃から擬洋風の潮流は木骨石造系から漆喰系へと流れを変え、各地で急速に普及していく。

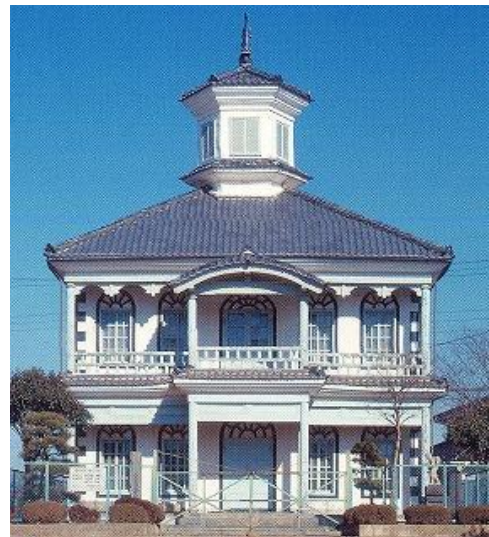
<藤村式>

最も早く、また最もよく盛り上がったのは、長野、山梨、静岡の三県で、静岡県ではチョンマゲをやめて髪結いの代金を積み立て、学校建設費に当てようと、市民に断髪を求める布告が発せられた。隣県の山梨県令藤村紫朗は、静岡県に遅れまじと布告「男子たるものは一人も洩れなく斬髪となり、結髪の冗費を積みて学校設立の要資を補い、一日も早く落成の運び肝要たるべし」—明治六年四月十八日告示— を発し、断髪しない者からは特別税を取るなど大いに成果が上り、翌七年には静岡を追い抜いて早くも琢美学校(M7)と梁木(やなぎ)学校の二校が完成する。これは全国的にも早い方で、日本最初の京都の柳池学校(M2)、山口県の岩国学校(M3)、横浜の高島学校(M4)などに次ぐものである。設計・施工を担当した棟梁たちには学校というものがどんな施設なのか、求められる部屋や間取りはどうすればよいかといった基礎的な知識はなかったと思われるが、学校とはこういうものだという基本を指示したのは県令の藤村紫朗とされている。というのは藤村が普通の県令なら棟梁に任せたかもしれないが、彼が“土木県令”とあだなされるほどの建設好きで、かつ、当時の県令にしては珍しく、学校というものについてすでに体験済みであった。彼の行政官としての最初の任地京都府では小学校教育の確立に力を入れており、日本最初の柳池

学校が前年に完成したばかりであったこともあって、当時少参事の藤村は権大参事(副知事クラス)の下で小学校のことについて十分に実務を経験していた。藤村は、続いて大阪府に転任し、明治4年から5年にかけて小学校建設を推進する立場にあり、その間神戸の居留地で学んだと思われるヴェランダコロニアル風の擬洋風建築を手掛けている。その後山梨に転じて、琢美と梁木のインク壺型デザインの構想を持ち込んだと考えられている。その後も睦沢(M8)、春米(つきよね)(M9)といった小学校のほか県庁舎、師範学校、郡役所、警察署、病院、裁判所、製糸工場、郵便局が生まれる。藤村県令のリーダーシップによって作られた洋風建築は百件以上にのぼると推定され、山梨県内はどの村にも一つはあるといわれるほど広まり、昭和に入ってから親しみを込めて「藤村式」と呼ばれるようになる。藤村の下で設計・施工を担当して実際に藤村式を作り上げたのは、地元の棟梁である小宮山正太郎(琢美、梁木学校)、松木輝殷(てるしげ)(睦沢学校)、土屋庄蔵(東山梨郡役所 M18)らで、小宮山は江戸の田安家作事頭をつとめた前歴をもち、松木は甲州の大工集団“下山大工”の出で身延山の造営に参加した経験をもち、ともに伝統様式をマスターした宮大工であった。土屋は左官の棟梁である。藤村式擬洋風は、明治20年藤村紫朗が13年間勤めた山梨県令を辞め、愛媛県に転任したことで終る。しかし、彼は新しい任地でも擬洋風作りを試み、甲府から小宮山を呼んで、松山に師範学校などを建てさせている。また、小宮山は静岡県にも招かれて静岡裁判所を手掛けているので、藤村式は静岡と愛媛に飛び火したことになる。



旧睦沢学校(甲府市)



旧春米学校(山梨県富士川町)

<開智学校と立石清重>



旧開智学校(松本市)

明治4年筑摩県(現・長野県の中南部)に赴任した永山盛輝は、“教育県令”とあだなされるほど熱心に教育環境の充実に尽くし、警察力を使って未就学児を学校に通わせるまでして日本一の就学率を達成しているが、その一環として、どこにも負けない小学校の建設を決意し、棟梁として立石清重(せいじゅう)を選んだ。彼が選ばれたのは、宮大工としての実績をもつ47歳の働き盛りであったことのほかに、息子を開成学校(東大の前身)の医学校に進ませ、自らも「東京日日新聞」を定期購読していたことからもうかがわれるように、進取の氣宇に富んでいたからであろう。はじめて取り組む学校建築というものをどう学ぶか。方法としては先進地に行って既にできている洋風建築や小学校を見聞し、作り方を学ぶしかない。清重は明治8年の起工前後に2度中仙道と甲州街道を歩いて上京し、東京方面と山梨の西洋館を探訪している。探訪した際のスケッチが残っていて、大蔵省、開成学校、三井組などがあり、林忠恕と清水喜助の擬洋風にもっぱらひかれ、ブリッジェンスやウォータールスの石と煉瓦の本格派の西洋館への関心は薄かったらしい。東京以外では山梨の藤村式を見ており、スケッチに甲府の梁木学校と日川学校が書き留められている。立石清重は先行の事例から学んだデザインを組合わせて開智学校



旧開智学校玄関部分

を設計したのではなく、全く独自の意匠を考案していることは明らかで、たとえば二階バルコニー出入口上方の黒漆喰による奇妙な模様は、本来なら門扉に使われる鍛鉄細工であるべきものだが、漆喰で表現している。また、車寄せの唐破風に舞う二人のエンジェルは他に例を見ないものであるが、これは東京日日新聞の記事に載ったデザインからとったのではないかと言われている。通俗的な印刷物のデザインを小学校の入口に掲げるような大胆さは、清重の気持ちを表しているものなのか、開化の時代、新しい教育、そして開智といったイメージをエンジェルの図像に託したものであろう。このようにして出来上がった開智学校は、以後、県内の学校の目標とされ、後から作られる擬洋風小学校に強い影響を与え、隣の諏訪盆地の高島学校(M12)、山一つ越えた格致学校(M11)、隣村の山辺学校(M18)など開智系デザインが生まれている。藤村式や開智学校に見られるように、先進地に学んで一つの例が作られ、そこからさらに周囲に影響がしみ渡っていく、といった経過が全国のいろんな地域で繰り返され、漆喰系擬洋風は全国に根をおろしたのである。

島根県内の例として、松江で最初の擬洋風とされる田野家住宅(旧田野病院 M4)、江津市の飯田邸(旧江津郵便局M23)が早い時期の事例であろう。



田野家住宅

田野家がこの地に医院を開設したのは明治9年(1886)、松江病院(松江赤十字病院の前身)院長まで勤めて退任した田野俊貞の時、病院とともに安仁堂という医学塾を開いている。永井隆の父永井寛は安仁堂の学生であった。現存する主屋は木造2階建てで入母屋の土蔵造であり、洋風と和風が混在する擬洋風で、松江では最初の擬洋風建築とみられる。



飯田邸(旧江津郵便局)

飯田家はもともと江津で郵便局を運営していた。現在の建物は明治20年ごろ3代目局長の飯田源之丞が神戸の西洋風の貿易館を見てこのような建物を作ろうと、地元江津本町の材木商豊田藤太郎に設計を依頼したが、豊田が神戸に見学に行って見て来たのは教会であつたらしく、現在にもその時の姿が取り込まれているといわれている。ステンドグラス、テラスなどを用い、当時でも近隣で話題の建物であつたという。



大田市役所第一分室

大田市役所第一分室(旧松江銀行本店M6、のち山陰合同銀行太田支店T8、現在は大田市大森町に移設)は、木骨土壁の土蔵造りで、1、2階とも漆喰塗仕上げを用いており、初期の擬洋風の手法が感じられる。

<参考文献>

- 日本近代建築の歴史 村松貞次郎著(岩波現代文庫)
- 日本の近代建築 上 下 藤森照信著(岩波新書)
- 日本近代建築大全 米山勇 伊東隆之(講談社)
- 日本の建築 8 日本建築学会編(新建築社)
- 島根県の近代化遺産 島根県教育庁文化財課編
- しまねの家-住まいと町なみ-(社)島根県建築士会編